
ホットニュース(平成13年度／第45号)

● 今月の業界ホットニュース／街づくりの実践者

青森県で仕事をしていたところ、県内市町村の都市計画系職員の定期的な研修の一環として開催する都市計画・都市観光に関するシンポジウムに講師を紹介して欲しい、との依頼があり、長野県小布施町で精力的に街づくりをリードしている米人セーラ・マリ・カミング嬢を紹介し、開催地弘前にお連れした。講師陣は他に、弊社今井と地元側では弘前大北原先生、葛西県都市計画課長、および黒石市のTMO代表木下啓一氏の5人である。

民間のお二方は、それぞれの地域で日々街づくりの実践を行っておられ、話の内容にはリアリズムの迫力がある。

黒石の話には感心して以前にも取り上げたが、和風のみせの街並みを壊すマンション建設を阻止するために、その敷地を利用法を考えないままに3日で6000万円集めて買い取ったというグループである。木下氏はそのリーダーの一人で、昨年TMO「津軽こみせ株式会社」を立ち上げその代表として、物産店津軽こみせ駅の運営や津軽三味線の育成などに活躍しておられる。こみせの構えを維持している造り酒屋の大改装を、そのご主人とロマンを持って語りながら、一方でTMOを3年で黒字にすると切り切るリアリズムを備えておられる。

小布施町はもともと和風の街並み整備に先進的に取り組んでいたところではあるが、セーラ嬢はそれにブルドーザー的勢いで拍車をかけつづけている人である。彼女は街づくりという言葉は嫌いだそうで、自分が行っているのはライフスタイルの追求のプロセスと言っている。日本文化に憧れて来日した彼女が、水の合った小布施の街で自身のライフスタイルを追求・展開することで、この街がますます日本文化の染み込んだ魅力的な街に再生されつつあるようだ。(因みに、セーラ嬢は月刊誌「日経ウーマン」の選定する、「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2002」の1位に選ばれている。現在発売中の同誌に詳しく紹介されているので、ご一読を)

より多くの方が、それぞれの地域でその街の持つ良さを活かしたライフスタイルを考え、追求するようになれば、魅力的な街がこれからも増えていくのではないかと期待される。

(代表取締役 堀田 紘之)

● バリアーについて

私事ではありますが10月20日に駅の階段から落ち、左膝のお皿を割ってしまいました。しばらく入院し、今はリハビリのため週3回の病院通いが続いており、何かとみなさまへはご迷惑おおかけしております。

けがをした日はバリアフリーのワークショップ帰りで、バリアフリーの現状の問題について多くを感じているところではありました。しかし実際その立場で(左足をサポーターで固定しています)目的を持った行動をしようとしますと、街全体がバリアーからできてきているような実感がひしひしと伝わってきます。病院内ではバリアーとなるものはほとんどなく安住していましたが、退院しいったん外へ出ると段差や傾斜等すぐにバリアーに直面し、移動の制約に四苦八苦しています。当然駅や道路でのバリアーについてですが、現実施設の制約や地形の制約等があり、全てをバリアフリーとするには、はじめから全てを作り直ししなければならないようなことになり、問題は大きすぎるように思います。また、視聴覚障害の方は別の問題も大きく、バリアフリー法による駅や特定経路等での対応以外にも運用面での移動手段をセットに検討する必要が大きいと実感しています。実際私も移動にタクシーを使うことが多くなり、駅一目的地間の移動に大きな負担となっています。本来バスの利用をすべきなのでしょうが、なかなか特定の移動目的のために利用できるバスは少なく、たとえばダイヤモンドバス等個別目的に対応できる短中距離の移動手段が欲しいなと感じています。

(交通計画部長 大沼 安秀)

● みんなの自転車

先日、T区主催の「コミュニティサイクルシンポジウム」に参加した。最も身近な交通手段である自転車は短距離移動において非常に重宝する反面、その弊害も大きい。所謂、鉄道駅周辺などでの放置自転車問

題である。放置自転車対策の取組のひとつにコミュニティサイクルがあり、コミュニティサイクルとは利用者が共同で自転車を使用するレンタサイクルシステムのうち、街なかにサイクルポートと呼ばれる施設をたくさん配置することにより、そこでの貸出・返却が自由にできるシステムである。T区では、このコミュニティサイクルが浸透することにより、利用者が増大し、自転車交通の公共交通化を考えているようである。

一方、T区には「みんなの自転車」という市民団体がおり、公共とは違う発想で区内なら「だれもが、いつでも、どこにでも乗って良い自転車」の提唱を行っている。このような共有自転車を実現するためには、多くの問題を解決していかなければならないことは事実であるが、何事も一歩踏み出さなければ始まらないわけであるので、「みんなの自転車」の今後の活動に期待したい。

(第四計画室 石井 泰良)

●青年海外協力隊レポートvol.6～ラマダーン、イスラムの聖なる月

モロッコはイスラム国家である。イスラム暦の第9月はラマダンと呼ばれる断食月であり、今年は11月17日早朝(モロッコ時間)から29日間または30日間となる。新月になった時から次の新月まで、月の満ち欠けによるのでその時になってみないといつ終わるかはわからないという。

断食の時間は日の出から日没まで。日の出ている間は食べることはおろか飲むことも許されない。厳格な人になると唾も飲み込まないほどだ。今年は冬にあたるので、朝5時半から夕方17時半までの12時間だが、夏はもっと長くなるという。そして、日が沈んだ瞬間その日の断食は解禁され、フットゥール(アラビア語で朝食の意)と呼ばれるその日最初の食事をとる。これは栄養バランスを考えた消化に良い食事が中心で、メインはハリラと呼ばれる豆やパスタの入ったトマトスープ。これをシバキヤと呼ばれる蜂蜜漬けかりんどうのようなものと一緒に食べる。その後、22時や23時頃になると、肉を使ったメインディッシュの食事、朝5時頃簡単な朝食をとるのだという。

ラマダンの間は、勤務時間も変わる。普段は長い昼休みを挟んで午前3時間半、午後4時間の勤務時間が、9時から15時までの6時間となる。しかし、前述のように夜中食べているので、睡眠不足だったり空腹だったりして集中力がなく、お祈りに抜け出すことも多いので、普段に増して仕事の効率は悪くなるようだ。

ラマダンはイスラム教徒にとって、神に近づくことのできる聖なる月である。身を清め、一心に祈りを捧げることにより、神を身近に感じることができるという。そもそもイスラムとは、1)アッラーを唯一の神・モハメッドはその預言者であるとする信仰告白、2)1日5回祈りを捧げること、3)喜捨(貧しい人への施し)をすること、4)断食をすること、5)聖地メッカを巡礼すること(それが可能な人のみ)を信条としている。これを実践していくことがイスラムの信仰だが、日本で「何かの縁で」とか「仏様の御導きで」と言うところを「アッラーの神様のおかげで...」と言い換えれば、イスラム教も理解しやすくなる。生活の中にもイスラムの教えは多く活かされているが、特段堅苦しいものではなく生活上必要な知恵のようなもので、私もあまり違和感を覚えずに生活できている。

(第三計画室 酒井 夕子)

アルメックホットニュース(平成13年12月15日発行)

////////////////////////////////////